

# 永遠の少年

## ——鈴木啓二先生を送る——

森 山 工

鈴木啓二先生には、二つの〈顔〉があるように思えます。

一つめの〈顔〉は、いうまでもなく、研究者として、また教育者としての〈顔〉であり、ここにおいて鈴木先生はきわめて厳格な論理と該博な知識に裏打ちされた思考を展開されます。後期課程フランス研究コースでの卒論審査や、大学院での修論審査および博論審査で何度となく席をご一緒させていただいたわたしには、そうした場で学生の論文に質問をされ、コメントをされる鈴木先生の思考の軌跡と知的ひらめきを追うことが、何よりの楽しみでありました。

もう一つの〈顔〉とは、遊びの達人としての鈴木先生です。カラオケの場に、これも何度となくご一緒させていただいたわたしには、ご自分の歌の順番になると決まって立ち上がり、腰で軽快にリズムをとりながら、持ち歌(そのレパートリーは驚くほど広い)を歌われる鈴木先生が、本当に歌うことを楽しんでおられることが実感されました。時空間が画された非日常の場において、その非日常を心底楽しんでおられる(他の人の歌を聴くときも含めて)ご様子に、遊びの「達人」としての鈴木先生が垣間見られます。

この二つの〈顔〉に共通して見て取られるもの、それは、「永遠の少年」としての鈴木先生のお姿ではないでしょうか。第二の〈顔〉については、いうまでもないことですが、遊びという場に身を投入し、そこに没入するという経験は、「大人」になるにつれて忘れがちになるものです。ロジェ・カイヨワが遊びの要素に数えた「眩惑」の感覚を、いつまでも保持しておられるということ、このことは、鈴木先生が「永遠の少年」であることを証するにあまりあります。

それでは、第一の〈顔〉、すなわち研究者・教育者としての鈴木先生についてはどうでしょうか。それは、飽くことのない知的好奇心をもち続けることと同義でありましょう。どのようなテーマであれ、論文を生産されること。学生の執筆した論文のテーマがどのようなものであれ、それについて真摯に向きあいつつ、的確な質問とコメントをし続けること。ここにおける鈴木先生に「大人」の「成熟」がないということではありません。しかし、それ以上に、「少年」のような、ことばのよい意味での無邪気さをもって、研究と教育に没入する鈴木先生には、「永遠の少年」としての形容こそ似つかわしいものであるように思えます。

わたしにとって印象深いのは、当時の小地域フランスの教員が中心となって世に出した『フランスとその〈外部〉』（石井洋二郎・工藤庸子編、東京大学出版会、2004年）における鈴木先生のご論文、「触媒としての外部—ヨーロッパ的「精髓」の回帰をめぐる」です。このなかで鈴木先生は、ジャック・デリダから論を起し、ポール・ヴァレリーを正面から取り上げつつヴァルター・ベンヤミンに触れ、右派の思想家アンリ・マシスを論じたかと思うとシュルレアリストたちの動向を見据え、美術批評家のジャン・クレールを批判的に論じて文章を閉じるというアクロバティックなまでの論文作法を見せておられます。「アクロバティックなまでの」とあえて書きました。もちろんこれは「真面目な」学術論文であることは確かなのですが、その「アクロバティック」な作法のなかに、上で触れたカイヨワ的な意味での「眩惑」を感じ取れることもまた確かであり、書き手である鈴木先生ご自身が「眩惑」のなかで文章を紡ぎ出されていたのではないかと思わせるほどです。

このご論文は、「矛盾に、アポリアに、二律背反に耐えること」（前掲書、5頁）という一文からはじまります。そして、フランスが〈外部〉の脅威に晒される都度、フランスのあるいはヨーロッパ的な原初的諸価値への遡行と回帰が生じることを歴史的に跡づけています。

アポリアはかくして、たえずその緊張した磁場の解体の危機に身をさらしている。そしていうまでもなく、この伏在する解体の危機がことさら顕在化され、加速されるのは、「危機」の時、すなわち、自らの外部に、求心力を持った他者が立ち現れてくる時である。その時「外部」はいわば触媒となって「内部」の求心性を強め、外部との境界を明確にし、アポリアを、二律背反を解消させる。（前掲書、7頁）

危機的状况はこうした多様性を単一性へと収斂させる。それはいわば「外部」が触媒となって内部の統一性が高められていく過程である。（前掲書、9頁）

ヴァレリーに密着しながら、鈴木先生はこうした状況を批判的に捉えておられます。それは、フランス的な原初的価値への、いうなれば安易な回帰に安住することへの批判であります。そのような安住の地に安息を見いだすのでなく、フランスのもつさまざまなレベルでの多様性をそれとして認識し、一元性と多様性とのほざまにあつて、「ほざまにある」というアポリア的状况に耐えること。鈴木先生はこの重要性を喝破しておられます。

ここで論じられた状況は、文化人類学を専門とするわたしにも共感できるものです。文化人類学者は、自分が調査する地域（その「地域」自体が可塑的なものなのですが）の文化的な一元性と多様性とのあいだに把握されてしまうことがつねだからです。このと

き、その地域文化を単純な一元性に還元したり、多様性に分散させたりすることなく、むしろ一元性と多様性との「はざまにある」べく、自身の研究者としての位置づけを図ること。このことが文化人類学者には求められているのではないか。「矛盾に、アポリアに、二律背反に耐えること」が必要なのではないか。鈴木先生のご論文からこうしたことを学びました。

このように、わたしにとって鈴木先生は偉大な先達であることは間違いありません。けれども、その先達は、若々しい眼差しをもって学問に、そして遊びに向きあう、「永遠の少年」なのでした。